

## 「長宗我部元親」鬼を引き連れた四国の覇者



みなさんお久しぶりです！今回は四国の覇者「長宗我部元親」(ちょうそかべもとちか)です！長宗我部元親は有名な戦国武将なので知っている人も多いのではないのでしょうか！しかし、やはり歴史の教科書にはほとんど載っていません。だから今回紹介することにしました。ちなみに私は好きな武将は？と聞かれるとたくさんいるのですが、その中でも長宗我部元親は上位に位置します。なぜならただだ「かっこいい」からです！超かっこいいんです！歴史通信6で書いた九州が生んだ傑物「島津義弘」に負けないくらいかっこいいんです！では本編へどうぞ！

長宗我部元親は四国の土佐の国(現高知県)の岡豊(おこう)の領主です。ぶっちゃけ誰も知らないような小さな領主で、群雄割拠の四国では有名人でもなく、父親の国親(くにちか)は落ちぶれていった長宗我部家を何とか立て直すので精一杯といった感じでした。ここで第一のポイントですが、「土佐の国＝鬼の国」です。ここは少し日本では異質な地域です。土佐は本州から離れた四国にあり、さらに四国山地の南側にあったので、当時の本州人からしたら未開の地で、文化交流などあまりない場所でした。馬の上に鞍をのせることも知らない文明の遅れた地域で裸馬に直接乗って戦っていたワイルドな国です。だから、本州での犯罪者が島流しの刑になると土佐に送られると恐れた地域です。実際に流刑地として土佐はたくさんの罪人が送られてきました。それに元々土佐の男たちは荒くれものが多く、何かモメたら話し合いではなく、ケンカか相撲で片を付けようという発想の地域です。すさまじいですよね！話し合いが通じないというのは(笑)。みなさんの学級で例えると「合唱コンの曲何する？」「俺はドラえもんの歌！」「いや俺はアンパンマンの歌！」「よっしゃ殴り合いで決めようぜ！最後まで立ってた奴が決めるでいいな！」「先生それでいい？」「もちろんや！全力を尽くせよ！」「みたいな感じです。そうとうヤバイですよ(笑)。高知は現代でも闘犬と言って犬(土佐犬)にまでケンカさせる国ですからね(笑)。さらに土佐と言えどとにかく酒豪の国です。土佐の盃(さかづき)は有名で、上の写真のように円錐型をしています。別の盃は小さな穴があいています！怖くないですか？勘のいい人はその強烈さが分かりますよね！酒を注がれたら飲みきるまで置けないんです。こぼれちゃうので。また、穴が空いている盃は、外側から指で押さえないとこぼれるので手を離せないのです。つまり酔い潰れるまで飲むしかありませんよね(笑)。さすが日本一の酒飲みみの国「土佐」ですよ。ちなみに高知では現代でも酒飲み大会があります。何と一升(1.8ℓ)すべてを一気に飲むスピードを争う大会です。日本酒一升なんて、ものすごく酒が強い人が一晩かけて何とか飲みきれる量です。普通の人はいせいで半分くらい飲めたら良いほうです。ちなみに前回大会の優勝者は12秒だそうです(笑)。異次元ですよ！つまり、「土佐と言えど、ケンカと酒の国。」そんな中で育った豪快な荒くれもの達がうじゃうじゃいるところだったのです。つまり、誰もまともに支配できない国だったのです。だからいつしか「鬼の国」と呼ばれるようになっていました。実際、後の関ヶ原の戦いの後(江戸



時代になるとき)、徳川家康から土佐一国をもらった戦国武将山内一豊が土佐に入ったとき、誰も言うことは聞かないし、全く支配できなかったそうです。どうしようもなくなった山内一豊は最後は相撲大会を開くと嘘をつきます。すると荒くれものの親分たちは相撲が大好きなので、みんな集まったところを全員鉄砲で撃って殺すというとても卑怯なことをします。そこまでしなければいけないくらい土佐は支配するのが難しい土地だったのです。山内一豊が土佐に来る50年ほど前の戦国時代真ただ中、その誰もコントロールできないはずの鬼と呼ばれた荒くれ者軍団を全て従え、土佐から四国全土を支配した覇王、それが長宗我部元親だったのです。

長宗我部元親は豪傑とはかけ離れた見た目だったそうで、色白で背が高く、あまり口数の多い方ではなかったようです。そのため、「姫若子」と呼ばれていたようです。どちらかと言えば戦国時代より、現代の女性にモテそうなクールな美青年のような気がしますね。しかし、内に潜む情熱は熱く、頭脳も明晰だったようです。また、土佐の小さな領主でしかない長宗我部家の周りにはたくさんの敵がいました。そんな敵の中でも土佐七傑の一人、本山茂辰は当時土佐で力を伸ばしていました。その本山氏と1560年、戦(いくさ)になります。この戦いで、22歳の長宗我部元親は遅まきの初陣を飾ります。敵の方が圧倒的に勢力が大きく、劣勢に立たされましたが、長宗我部元親は自ら6mもの槍を豪快に振り回し、軍の先頭に立って敵陣へ突撃を仕掛け、一気に形勢を逆転し、この戦を勝利に導きます。今まで「姫若子」と揶揄していた家臣達はその勇猛げりと圧倒的強さに驚き、元親に惚れこみます。また、父親であり、大将である国親が「元親の振る舞いや武者遣いには、もはや何の問題も無い。」と最高の褒め言葉を残し、この世を去ります。

元親が長宗我部家の当主になってからは、破竹の勢いで土佐一国を統一します。その原因は2つあります。まず、1つ目は元親はとても頭が良かった点です。何でも腕力に訴える土佐の風潮とは逆に、敵の家来などを取り込むなどの調略や遠く離れた本州の斎藤利三(斎藤氏的美濃国は当時天下統一の最重要拠点と言われた)や今後伸びるであろう織田信長の家来などと姻戚関係を結びます。先の先の先、つまり土佐を統一した後、四国を統一した後の20年先まで読んで戦略を練っています。実際、後に天下に王手をかけるのは美濃を手に入れた織田信長です。これを読んだ元親は、もはや天才としか言いようがありません。また、2つ目は勇猛で強かったということです。荒くれ者の鬼と呼ばれた土佐人からして最大の説得力は「強さ」です。元親の勇猛さには土佐の鬼と呼ばれた男たちは憧れるしかありません。その憧れの元親に「土佐が生んだ鬼と呼ばれる強き者たちよ！お前たちのその剛腕をこの元親に貸してはくれぬか！この元親と共に、かつて誰も成しえなかった四国統一の夢を叶えようぞ！その先も命ある限り我についてこい！お前たちとなら天下統一の夢が見れる！我と共に土佐の鬼の強さを日ノ本全土に轟(とどろ)かせようぞ！！」と言われたら、もう土佐人としては、うれし涙を流して一生ついていくしかありませんよね！ちなみに、今の元親の言葉はもちろん私の想像です(笑)。でも、まあそういった雰囲気のことでは言っているでしょう！でないと、誰にも従えることのできないはずの土佐人を一手にまとめることはできません。この土佐人の軍団は「一領具足」と呼ばれるようになります。元親からいつ呼ばれてもすぐ戦に駆け付けられるように、平時に農業をする際は常に鎧や武具を田畑の隣に立てていたことからそう呼ばれました。いかに元親が土佐人に愛されていたかがうかがえます。その鬼の軍団を率いて元親は四国全土に打って出ます。伊予国(いよのくに、現愛媛)、讃岐国(さぬきのくに、現香川)、阿波国(あわのくに、現徳島)へと侵攻し、とうとう1585年、誰も成し遂げることができなかった四国統一の夢を果たします。しかし、この頃、本州は豊臣秀吉が天下統一への道筋を完成させているときでした。その12万を超える圧倒的勢力の豊臣軍が四国征伐を掲げ、侵攻してきたとき、勝てるはずのない勝負に対し、元親は降参するのではなく、徹底抗戦をうたい戦いを挑みます。男が一度見た夢を敵が強いからと言ってあきらめるなら、男に生まれた意味がない精神ですよね！カッコいい！しかし、最終的にこの戦いに敗れ、長宗我部家の夢はここで一旦潰えます。元親もこの時すでに45歳を越えていました。しかし、元親には希望がありました。それは嫡男の信親(のぶちか)の存在です。信親の才能と実力は元親を凌ぐ天賦の逸材で、例えこの命が夢半ばで散ったとしても、信親がいる限り、元親の夢、長宗我部家の夢はまだまだ続くと信じていました。しかし、この後の九州征伐での島津攻めで信親が戦死します。元親の夢はここで儚く散ったのでした。

後日談ですが、元親の四男、盛親はこの後、1600年には関ヶ原の戦い、1615年には大阪夏の陣で真田幸村などと共に徳川家康に対し挑みます。長宗我部家の再興のため、父の夢のため、生涯何度も天下分け目の大戦(おおいくさ)に挑みました。そして夏の陣で敗れ、この世を去りました。長宗我部家の当主らしく命をかけて夢を追いつける立派な人生でした。

皆さんもできるかできないかで夢をあきらめるのではなく、やりたいかやりたくないかで決める！そういう精神は長宗我部元親から学んでいきましょう！